表1　自分の声について

	学生A	学生B	学生C
4月5日	ふつう	嫌い	調査の日，欠席
2月7日	好き	好き	分からない

以上，女子学生が大部分を占める保育者養成機関において，男子学生の表現意欲を高めるという点では，本実践は有効に働いた。今後，配慮すべき点は，以下の通りである。

・クラス編成をする際，学籍番号順番等機械的に振り分けるのではなく，男子学生については1つのクラスに固める方がよい。

なお，本実践は筆者の短期大学での初年度の実践であるだけに課題も多い。今後，さらに研鑽を積んでいきたい。

言語連想における時代的変化の検討
── 幼児について ──

短大　心理学科　荻　野　七　重

言語連想について，その反応後を品詞によって分類し，発達的変化を検討した研究がアメリカの研究者によって行われ，英語では刺激語と異質な反応語が年齢の増加に伴って減少し，等質な反応語が増加することが確かめられた。荻野・小杉は，日本の幼児，小学生，中学生を対象として，一連の研究を行い，この発達的変化の傾向は日本語においても同様であることを確認している。

これらの研究は1970年代を中心に行われてきた。そこで，このたびは，ほぼ30年という時間的経過の中で，反応語の持つこれらの傾向がどの程度不変的なものであるか，性差については変化がないか，また，どのような反応後の内容的変化が認められるかを検討することを目的として実験的研究を行いたいと考えた。

そのために，2006年度は，幼児のみを対象として，連想実験を行うことを計画した。

実験は，10月～11月を実施時期と考えていたが，都合により，2007年1月・2月に行った。

連想実験の内容は，容易な刺激語（名詞，動詞，形容詞からなる93語）を用い，実験者が被験児一人ひとりに口頭で刺激語を言い，反応語を求める方法である。

被験児は，小平市にある幼稚園1園，保育園2園の協力を得て，3歳児95名，4歳児110名，5歳児100名，計305名のデータを得ることができた。

得られたデータは，すべてコンピュータ入力し，はじめにこのデータに基づく年齢間，性別間の諸種の比較検討を行い，次いで30年前に行った実験結果との比較を行う予定である。現在は，反応語のデータベース化の段階にあり，結果を報告するまでに至っていない。研究報告は，本学「紀要」あるいは他の機関紙に，資料や論文として掲載する予定である。

中学生の非行傾向行為のリスク要因：教師の視点からの検討

発達心理学　小保方　晶　子

中学校での問題行動の1つに非行があり，教師は日々対応に追われている。教師は学校現場で生

活指導を行う上でどのような工夫をしているのだろうか。本研究は，中学校で生活指導を担当している教師に面接調査を行い，教師が経験上把握していることを明らかにすることを目的とした。

2006年8月中旬～9月初旬に，A市（東京近郊）の公立中学校9校の生活指導主任を担当する教師9名（男性）に半構造化面接を行った。特に，①非行の原因・背景だと考えられること　②非行の予兆を捉える視点　③非行の予兆への対応の仕方　④教師による非行の捉え方（タイプ）　⑤問題行動の学年差　⑥問題行動の性差　⑦非行が進化する子どもとそうでない子ども　⑧非行の開始時期による違い　⑨中学校移行期の問題行動への対応の仕方について尋ねた。

結果については，現在分析中であるが，結果の一部については，日本心理臨床学会第26回大会（「中学校教師による生徒の問題行動を捉える視点」小保方晶子・無藤隆）にて，報告を行う予定である。以下はそこで明らかになったことを報告する。教師による生徒の問題行動を捉える視点として，小学校から中学校への移行には，非行行動の増加が指摘されているが，問題行動の背景として小学校からの問題行動の持ち越しが言及されることも多かった。教師は移行に伴う変化（学級担任制から教科担任制）に早く対応させようとしていることが見出された。また，教師は，服装などの直接的な変化だけでなく，雰囲気の変化といった日々の生徒との関わりの中から問題行動の予兆を把握しており，直接的，間接的対応を行っていた。

本研究で明らかにした視点は，生活指導を担当とする教師の視点である。他の立場の教師や心理臨床的な立場で関わる者との視点との違いがあると考えられるため，今後その意義を検討していきたい。視点の相違を明らかにすることは，連携を行う上でも意義があると考えられる。

子どもと現代
── 幼稚園教育における発達臨床型保育内容研究 ──

子ども学部子ども学科　佐　々　加代子

現代の子どもたちの発達の歪み・変容ぶりが言われて久しい。幼稚園教育現場では，昨今，とりわけ，本来ならば家庭生活のなかで身につけてくるはずの日常生活習慣にかかわるさまざまな事柄が出来ない状態のままで来る子どもたちが増加してきているという。このことは，3歳児保育の1学期のみならず，年間を通じての教育の方法論そのものを変えていかなくてはならない状況があるということになる。現状を鑑み，今年度の教育の編成およびその実践をどのようにしたらいいのかということが，毎年の課題になってきている。子ども一人ひとりの育ちにおいて，個別的な課題を抱えているが故に，一人ひとりの育ちの評価をする。その上でクラス集団の把握をする。すなわち，一人ひとりの「育ちの幅」の評価のクラス集団版ができることになる。この集団での「育ちの幅」が見えてくることは，これから先行うであろう教育実践において，担任側に，従来の教育課程ですすめていくときの問題点を見出すことや，打ち破れないかもしれない壁に突き当たることも想定できる。分析的視点で評価・修正しながらの教育課程実践をしなくてはならない。しかしながら，現状の実践はそれほど生易しいものではない。個別的対応の見かたそのものでも，見えなくなってしまって，壁に突き当たってしまうと言う。教員が困ってしまうことになる。個が見えてきてこそ，集団の形成過程や人間関係の過程における展開に期待ができたりもする。発達臨床型の保育実践の試みに期待するのは，このような経緯をもったところからの要請もある。